

仲間との関わりを育てる国際理解教育 ～ 広島市立宇品中学校の国際理解教育実践 ～

広島市立宇品中学校
校長 村尾 栄二郎

1. はじめに

広島市立宇品中学校は、昭和22年4月に広島市立第四中学校として創立された市内でも最も古い中学校の一つです。学区は広島市の南端に位置し、文部省唱歌「みなと」にも歌われた宇品港（広島港）を抱えています。明治期の築港以来、港町として発展した街であり、原爆の劫火に焼かれることもなかったことから、未だに下町的な情緒も残しています。しかし、ここ十年、新規の埋立や広島南道路の建設、大型商業施設の進出、マンション建設等により、街は大きな変化を遂げつつあります。生徒数は昭和期には千数百人にもおよぶ大規模校でしたが、平成に入ってから減少傾向に入り、ここ数年は六百人台で落ち着いています。

さて、文部科学省「初等中等教育における国際教育推進検討会報告」（平成17年8月3日）では、国際化社会を生きる日本人を育てるために、「初等中等教育段階においては、①すべての子どもたちが、異文化や異なる文化をもつ人々を受容し、共生することのできる態度・能力、②自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立、③自分の考えや意見を自ら発信し、具体的に行動することのできる態度・能力、を身に付けることができるようにすべきである」と述べ、小・中・高等学校における国際理解教育の目標を明らかにしています。

また、今の国際理解教育実践の抱える課題として、「外国語や社会科等の教員や、関心のある教員が取り組みやすいものとして捉えられる傾向があり、学校全体の取組となっていないという指摘があります。さらに、英語活動を実施することがすなわち国際理解であるという考え方が広がっていたり、国際理解に関する活動が単なる体験や交流に終わってしまうなど、以前に比べ内容的に薄まっている、矮小化されている」ことが指摘されています。

2. 本校の国際理解教育実践の特色

以上の提言にも鑑み、広島市立宇品中学校では、次のことに留意した取り組みを進めています。

（1）実践目標を「仲間との関わりを育てる国際理解教育」とすること。

国際理解教育の目標が多様な文化・背景を持つ人同士が共生することにあるのならば、まずは同じ教室に学ぶ生徒同士、生活背景の違う生徒同士の関係を問い直し、生徒同士の信頼関係を築いていくことがその基底となるはずです。そこで、本校の国際理解教育は「自分自身を見つめること」「仲間との関わりを育てること」を基底とし、同じ教室で学ぶ仲間から地域・日本・世界へと同心円状に広げて考えることで、「人類共通の課題に取り組む主体を育てる」ことへと発展する体系的・継続的なものとして位置づけています。

そのために、セルフエスティーム（自尊感情）を育む学習ユニット、コミュニケーション能力を育てる学習ユニット等を実施しています。また、これらの学習プログラムについては、道徳の時間・特別活動・総合的な学習の時間の横断的な取り組みとしています。さらに、後述するように参加型学習を取り入れているの

も、学習プロセスの中で「人との関わり」について学ぶことをねらいとしているからです。

(2) 開発教育の視点・手法（参加型学習）を取り入れること。

本校の国際理解教育では、開発教育の視点・手法に学び、参加型学習を基本的なスタイルとしています。学習の中で大切にしていることは、次の通りです。

① そのねらいや内容だけでなく、学習方法を重視すること。

「方法はメッセージをもつ」という言葉があるが、たとえば教室で、「人権は大切である」というメッセージが学習内容として生徒に提示されたとする。しかし、もしその方法（学習形態だけでなく、教室の雰囲気や教師と生徒の関係などを含む）が生徒の人権を無視したようなものであれば、その方法自体が、内容と異なるメッセージを投げかけ、生徒は矛盾する二つのメッセージを同時に受け取ることになる。そのような場合、その学習成果は決して期待できるものでない。教育の方法は、本来そのねらいや内容と一致したものでなければならない。例えば、「人との関わり」について学ぶ時には、人の温もりが感じられる学習方法であるように努めることである。

② 学習結果よりも学習過程を重視すること。

人間関係にトラブルが生じたとき、その解決に特定の正解があるわけではない。トラブルの原因は多様であり、その解決への道筋を見つけ出すことは容易ではない。また、これは現代社会の抱えるさまざまな課題に共通することである。だから、「人・物・事との関わり」について学ぶにあたって、生徒は提示された正解をただ覚えればよいというものではなく、生徒どうしが共に話し合う中で、その現状や原因を理解し、解決方法を考えていくことが重要である。そのような過程の中での学びを生み出すためにも、その過程自体を目的とする学習方法が選ばれてはならない。

③ 参加型学習を取り入れていくこと。

参加型の学習方法を重視するのは、上述した「目標と方法の一致という視点」からも、また「学習過程の重視という視点」からも、当然のことである。参加型学習を「学習者が、単に受け手や聞き手としてではなく、その学習過程に自主的に協力的に参加することをめざす学習方法」と捉えるなら、そのためにはいろいろな手法を取ることができる。たとえば、発表・対話・実験・見学・調査・スタディツアー・ワークキャンプなどである。また、教室という狭い限られた空間でも、ディベート、ランキング、フォトランゲージ、シミュレーション、ロールプレイ、プランニングなどの手法が可能である。知識詰め込み型ではなく、生徒が主体的に参加する学習方法を取り入れる。

（「平成21年度『総合的な学習の時間』基本方針」より）

(3) 学校全体の取り組みとすること。

本校の国際理解教育は、総合的な学習の時間における学習を基盤にしています。総合的な学習の時間における国際理解学習は、学年の全学級で一斉に実施します。各学年では、実施の約一ヶ月前に行われる学年研修会で、担当者から提案された学習指導案により授業の進め方を研修します。参加型学習が中心となりますが、これまでの六年間の取り組みの成果からか、多くの教師が自信を持ってファシリテーターを務めることができるようになってきています。しかし、参加型学習の目的・手法に慣れていない教師もいるため、一部は模擬授業を行って進め方を確認していきます。当然のことながら研修時間は不足気味で、実施前日には学年教師（学級担任）が遅くまで残って打ち合わせを重ねることになるという実態があります。また、カードやシート作成などの教材準備にもかなりの労力が必要とされます。反面、これらの共同作業が学年教師の連帯感を醸成し、研修をより深いものに行っているという側面もあります。また、前年度の実践者からのアドバ

イスも得られるようになっており、学校全体の取り組みとなりつつあります。

(4) 学習時間の確保を図り、系統的な学習を目指すこと。

平成21年度の教育課程では、「総合的な学習の時間」を第1学年38時間、第2学年93時間、第3学年58時間実施することとしています。その中で、「仲間との関わりを育てる国際理解教育」の範疇に位置づけている学習ユニットは下記の通りです。教科学習や学級経営の流れとの関連を考慮しつつ、スキル学習（コミュニティ意識・セルフエスティーム・コミュニケーション能力・対立とその解決）を織り込みながら、学習ユニットを系統的に配置するようにしていますが、学校行事や定期試験等との絡みから、毎年のように学習時期を動かさざるを得なかったり、授業時数を変えざるを得ない実態もあり、学習の流れにはまだ大きな課題があります。

平成21年度「総合的な学習の時間」年間計画（抜粋）

〔第1学年〕（36／38時間）

	実施時期	テ　　マ　・　内　　容	実施時間	添　　付　　資　　料
①	4月	「クラス目標を作ろう！」〈スキル学習〉 コミュニティ意識を培うワークショップ	5時間	(1)平成21年度学習指導案
②	5月	「仲間と自分を考える」〈スキル学習〉 セルフエスティームを培うワークショップ	4時間	(2)平成21年度学習指導案
③	6月	「違いを認め合うということ」 異文化理解のためのワークショップ	8時間	平成21年度学習指導案(次項に掲載) ※ 第1学年の中心的な学習ユニット
④	9～10月	「お互いを理解するということ」〈スキル学習〉 コミュニケーション能力を培うワークショップ	6時間	(3)平成21年度学習指導案
⑤	1～2月	「地球市民の一人として」 地球環境問題についてのワークショップ リサーチ・レポート・プレゼンテーション	13時間	(4)平成19年度学習指導案(16時間) 平成20年度は縮小して実施 本年度指導案は現在準備中

〔第2学年〕（30／93時間）

	実施時期	テ　　マ　・　内　　容	実施時間	添　　付　　資　　料
⑥	4月	「クラスの中の一人として」〈スキル学習〉 コミュニティ意識を培うワークショップ	4時間	(5)平成21年度学習指導案
⑦	6月	「対立を解決するための方法」〈スキル学習〉 対立とその解決を考えるワークショップ	6時間	(6)平成21年度学習指導案
⑧	1～3月	「世界の人々と共に生きるために」 南北問題と国際協力を考えるワークショップ リサーチ活動・レポート作成・コンクール応募	20時間	(7)平成20年度学習指導案(20時間) 本年度指導案は現在準備中 ※ 第2学年の中心的な学習ユニット

〔第3学年〕（24／58時間）

	実施時期	テ　　マ　・　内　　容	実施時間	添　　付　　資　　料
⑨	4月	「クラスの仲間と共に」〈スキル学習〉 コミュニティ意識を培うワークショップ	4時間	(8)平成21年度学習指導案
⑩	5～6月	「平和を築く～「難民問題」を通して考える」 難民問題を通して平和構築を考える ワークショップ	10時間	(9)平成21年度学習指導案

⑪	10月	「世界で働く！国際ボランティア」 国際協力ボランティアを知るための ワークショップ	10時間	(10)平成21年度学習指導案 ※ 第3学年の中心的な学習ユニット
---	-----	---	------	--------------------------------------

3. 国際理解教育の実践例

ここで1年生の国際理解学習の中心ユニット「違いを認め合うということ」の実践について紹介します。

1年では、入学以降、「クラス目標を作ろう！」（4月：新しいクラスがどんなクラスであってほしいか。その実現のために自分は何をするのか。それぞれが所属する集団を自分のコミュニティとして認識し、主体性と責任を持って関わっていかうとする態度を育てる学習）、「自分と仲間を考える」（5月：自分という存在をかけがえのないものだと思う、仲間の人権を大切にしようとする姿勢を育てる学習）等のスキル学習を実施してきました。今回の学習（6月）は、その流れの上に実施するものです。入学から二ヶ月が過ぎたこの時期は、複数校から集まった生徒たちの人間関係が深まっていくと同時に、お互いに対する無理解や誤解・不信からトラブルが多発する時期でもあります。だからこそ、一人ひとりが皆違う個性を持っていて、それぞれの個性を認め合うことの大切さを教えていくことが必要です。この時間の学習は、「異文化理解」をテーマとしています。これはこれからの国際化社会を生きていくために、世界のさまざまな民族・文化と共生していく力を培うものであると同時に、まずは自分の身の回りの仲間をどう理解し、共生していくかを考えさせる学習でもあります。この学習を、生徒が周囲と円滑な人間関係を築き、学年・学級集団をより良く形成するための機会の一つとしていくことを目標としています。学校における学年・学級集団（人間関係）は生徒が社会につながる第一歩です。この一歩はやがて地域へ、全国へ、世界へとつながっていくはずです。

この学習も参加型学習の手法で実施しています。参加型学習そのものが、学習者相互のコミュニケーションを学ぶものでもあるからです。生徒と生徒の相互理解を図り、自分と異なるものと認め合う関係を築くために、一つひとつのアクティビティを楽しみながら、結果としてコミュニケーションスキルを向上させることを目指したものでもあります。なお、この学習の後は「お互いを理解すること」（9～10月：自分のこれまでのコミュニケーションを振り返り、多様な人がお互いを支え生かしながら、共に未来を築いていくためのコミュニケーションスキルを育てる学習）へと繋がっていきます。

平成21年度国際理解学習「違いを認め合うということ」（1年）学習指導案

1. 目 標

〔目標〕

- ・世界には多様な文化があり、それぞれの土地にはその土地の風土や環境、歴史や宗教などが深く関係していることを知る。
- ・知らず知らずのうちに、自分の中にできている「思いこみ」「偏見」「差別感」「固定観念」に気づく。
- ・自分と異なる価値観を拒否するのではなく、お互いの違いを認め、尊重しようとする力を育む。

〔学習テーマ〕 **「違いを認め合うということ」**

ユネスコ憲章前文は、第二次世界大戦を振り返りこう述べている。

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。ここに終りを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代わりに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。」

学校現場においても、落ち着かない状況が続いている。人間関係の歪みや、家庭に起因する生活の崩れを

なお、今回も参加型学習の手法を実施する。参加型学習そのものが、学習者相互のコミュニケーションを学ぶものでもあるからである。生徒と生徒の相互理解を図り、自分と異なるものと認め合う関係を築くために、今回もアクティビティを楽しみながら、コミュニケーションスキルを向上させることを目指したい。

日 時	内 容
【第１次】 6月５日(金) ３・４校時	① 文化が違ってどういうこと？ 【アクティビティ】 「レヌカの学び」・「世界の常識＝日本の常識」・「日本だって異文化だらけ」
【第２次】 6月１２日(金) ４・５校時	② 「食」から考える異文化 【アクティビティ】 フォトランゲージ・ブレインストーミング・クイズ・食体験
【第３次】 6月１９日(金) ３・４校時	③ 異文化の中に入ったら… 【アクティビティ】 シミュレーション・ゲーム「Barnaga（バーンガ）」
【第４次】 6月２６日(金) ３・４校時	④ お互いを尊重し、共に生きるために 【アクティビティ】 「ちがいのちがい」・「ここは日本なのだから」・学習のまとめ

学 習 の 展 開	学習支援の留意点
【アイスブレイキング】（グループ分け） - 生徒に目を閉じさせ、一人一人の額に何色かのシールを貼る。参加者は目を開けて言葉を使わないで自分と同じ色の仲間を捜す。 - グループができたあとに、自分の仲間が見つかるまでの気持ちや自分の行動を振り返ってもらう。5～6人のグループ（6グループ）になるように調整しておく。	〔10分〕 - ネパール女性の写真を見せる。 「ティカ」の説明…国教がヒンズー教のネパールでは、お祈りのあとに「ティカ」とよばれる赤い印を額につける風習がある。
A レヌカの学び	〔40分〕 ねらい ・ 知らず知らずのうちに、自分の中にできている「思いこみ」「偏見」「差別感」「固定観念」に気づく。 ・ 「レヌカの学び」は「自分の学び」であるということに気づき、異文化理解のカギは自分自身の中にあるということを実感する。

①各グループにレヌカの写真と手紙を渡し、それらを見ながらレヌカについて理解してもらう。 ②文字が書いてある方を上にして、18枚のカード1セットを各グループに配る。 ③それらのカードを、書かれてある内容が、「ネパールにいるときのレヌカのこと」なのか、「日本にいるときのレヌカのことなのか」という観点で分けていってもらう。その際、グループでみんなが意見を出し合い、よく話し合っけて決めて欲しいことを伝える。カードの裏側は見えてはいけない。9枚ずつに分けることができれば終了。 ④正解かどうかを確かめるために、カードを裏返ししてパズルになっている絵合わせをしてもらう。全問正解であれば、「ネパールにいる時のレヌカ」のカードはネパールの風景画、「日本にいる時のレヌカ」のカードは日本の風景画が完成する。 ⑤間違っカードやたまたま正解であっただけで実際にはとても悩んだカードについて自由質問を受ける。それらについてレヌカの気持ちを代弁する形で答えていく。それを聞いた参加者はカードを分ける根拠としたことが、いかに自分の固定観念に縛られていたかということに気づいていくことができる。 ⑥ワークショップを終えた感想を発表しあい、共有する。	・「レヌカ」とは、ネパール人女性の名前。彼女はネパール公立聾学校の校長で、4年前の25歳の時に研修のために来日した。日本で過ごしているうちに彼女は、ネパールにいるときとは別人のようになっていった。このことから、人は環境によって行動を変えながら適応して生きているのであり、このことを理解し合うことが、異文化理解につながるののではないかと考えられる。 ・全問正解が出ることはほとんどない。間違えたことで生徒は間違えたカードに大変興味を持ち始める。「なぜこれはネパールなのか」、「なぜ日本のことなのか」と。
B 日本の常識＝世界の常識？	〔25分〕
ねらい・日本の常識＝世界の常識とは限らないことを知る。	
①「日本の常識＝世界の常識!？」（6項目）を読み、日本の常識＝世界の常識とは限らないことを知る。 ②「日本の常識＝世界の常識!？」の中の一項目について、なぜびっくりされるのか。日本の常識に対してびっくりする国や地域では、どのような方法がそこでの常識なのか、グループごとに考える。 ③グループごとに発表して、全体で共有する。 ④「日本の常識＝世界の常識!？」の項目について、自分が当たり前だと思っている方法を否定されたり、拒否されたりしたらどのような気持ちになるのかを考える。 ⑤数人が発表して、全体で共有する。 ⑥教師がまとめを行う。	・異文化に驚くことはよくあることだが、逆に自分の文化が異文化として驚かれることがあることに気付く。 ・どのグループがどの項目を考えるのかはグループの希望に沿っても良いが、全ての項目がわりあてられるように配慮すること。 ・生徒の発表の後、それぞれの項目について解説する。（資料参照） ・なぜ常識の違いが生まれるのか、問いかけをし、次につなげる。 ・他の「日本の常識＝世界の常識!？」を紹介しても良い。

C 日本だって異文化だらけ	[2 5 分]
ねらい ・ 日本の中にも多様な文化があることを知る。 ・ 文化が生まれる背景を考える。	
①各自、「わたしの文化」シートに記入する。 ②グループから離れて、全ての項目の答が同じ人を探す。見つかったら、その場で座る。 ③グループに戻り、「わたしの文化」の中の二項目（文化）について、YES/NOの違いが生まれる原因（背景）について考える。 ④グループごとに発表して、全体で共有する。 ⑤この日の学習全体を通して気づいたこと、考えたことを「振り返り用紙」に書く。	・ 日本の中でも文化は多様で、自分と全く同じ文化を持った人は少ないことに気づく。 ・ どのグループがどの項目を考えるのかはグループの希望に沿っても良いが、全ての項目がわりあてられるように配慮すること。 ・ それぞれの文化の違いは、居住地域や両親・祖父母の出身地の気候や風土、宗教、嗜好等が関係していて、人によって異なっていることに気づく。 ・ 教師は多様な文化が生まれる背景について補足説明するが、その背景を細かく正確に突き止める必要はない。

学習全体の導入となります。初めにグループ作りを行いました。グループ・ワークを中心とした学習は学習プロセスの中でコミュニケーションを学ぶという意味からは当然のことです。アイスブレイキング・ゲームでグループを作りますが、そこに学級担任の意図を織り込むことも可能です。学びの深まりを考慮して、グループ編成を行うこともできます。初めに、各学級で「レヌカの学び」を行いました。どのクラスでも全問正解したグループはありませんでした。なぜ間違えたのかと考える中で、自分でも気づかない「思いこみ」や「偏見」に気づいたようです。続く、「日本の常識＝世界の非常識!？」も生徒にとっては意外性でいっぱいでした。それぞれの国・地域ではそれぞれの「常識」があり、自分で当たり前と思っている生活習慣を否定されたり、拒否されたらどんな気持ちがするかを考えました。身近な環境にも異文化が存在することを確認するのが「日本だって異文化だらけ」です。各自が「私の文化シート」に個人の習慣・趣味・嗜好についてYES・NOで答えます。その後、自由に動き回り、自分と全く同じ回答をしている人を捜します。自分と全く同じ習慣・趣味・嗜好を持つ人がほとんどいないということはとても意外だったようです。自分と異なる習慣・趣味・嗜好に出会ったとき、思わず相手を否定する言葉（「うそー」「信じられない…」等）が出ることに気づき、知らず知らずに相手を受け入れていない自分を知ることができたようです。

第2次「『食』から考える異文化」（6月12日(金)4・5校時）学年集会→学級単位

学 習 の 展 開	学習支援の留意点
【4校時】体育館 ・ 3校時後すぐに、各自トイレを済ませ、廊下にグループ順に整列・移動・体育館入場完了 （総合ファイル・筆記用具持参）	・ マイク&プロジェクター（ ） ・ 整列指導（ ） ・ ファシリテーター（ ）
A 世界の国をどれだけ知ってる？	[1 0 分]

ねらい・自由に意見を出させることで、全員が参加しやすい雰囲気を作る。 ・世界地図を頭に思い浮かべさせることで、これからの学習の心構えを作る。	
①グループごとに、世界の国名を思いつく限りシートに書かせる。 ②一番たくさん書けた班に発表させる。他の班は自分のシートをチェックし、出ていない国の名前を発表する。	・世界地図を描いたシート配布。 ・ガーナの名前が出るまでは続ける。 ・世界地図を示し、日本からガーナまでの距離を実感させる。
B ガーナってどんな国（フォトランゲージ）	〔20分〕
ねらい・ガーナの写真を教材に、日本とガーナの生活の違いを知らせる。 ・ガーナ料理(フーフー)の手食を紹介する。	
①「公衆トイレ」〔写真1～2〕 ②「頭に物を載せて運ぶ」〔写真3～8〕 ③「風呂」〔写真9～10〕 ④「ガーナ料理に使う杓と臼」〔写真11～17〕	・視覚的な情報以外は与えず、気づいたことを自由に発言させる。 ・生徒に「水の入ったバケツ」「机」を運ばせてみる。教師がやってみせる。 ・自由に意見を出させる。 ・手食であることを確認する。
C どんな食べ方だっておいしい	〔20分+昼食時間+30分〕
ねらい・「食」を切り口にして、自分には違和感のある文化にもそれぞれの文化や合理性があること、文化に優劣はないことを知る。	
①世界にはどんな食法（食べ方）があるのかを出させる。 「手食文化」「箸食文化」 「ナイフ・フォーク・スプーン食文化」 ②ステージ上で、教師（担任7名）が世界の料理をさまざまな食法で食べてみて、それぞれ感想を述べる。 ③今日の昼食の中で、さまざまな食法を試しても良いことを伝える。 （→体育館退場）	・自由に発言する。 ・三大食法文化を確認する。 ・「ご飯と味噌汁」「カレー」「スパゲッティ」「ハンバーグ」「肉まん」「フーフー」等 カレーとフーフーのみは本来の食法で食べる。他は、通常とは異なる食法で食べる。
【昼食時間】教室 ※各クラスの代表は調理室までフーフーを取りに行く。 調理室担当（ ） ※教室でさまざまな食法を体験させる。 フーフーだけは必ず手食させる。	・デリバリー当番以外のメンバー。返却も忘れずに行わせる。 ・嫌な者はしなくて良い。昼食時間中も自由に手洗いしても良い。 ・副担任も全員各教室で食べる。

【5校時】教室 ④食法（食べ方）には大きく三つあることを確認し、グループごとに三大食法のそれぞれの「優れたところ」（長所）を考える。 ⑤グループごとに発表して、全体で共有する。 ⑥三大食法文化圏の特徴・地域とその文化的背景について説明する。 ・食法の違いの背景には、食べ物・調理法の違いがある。 ・手食には、実は厳しいマナーがある。	・昼食時の体験を参考にする。 ・多様な文化を肯定的にとらえさせるために、短所は出さなくて良い。 ・教師用資料参照 ・食法の違いは、決して文化の発展過程を示すものではない。それぞれの食べ方には、それぞれの利点がある。特に「手食＝遅れている」という偏見は払拭したい。
D お隣の国とくらべてみよう	〔20分〕
ねらい・文化的に近い国、民族とも違いはたくさんあることを知る。	
①これまで、世界の国々と日本の文化が違うということを学んできたけれど、日本とよく似た国、共通の文化を持つ国はないだろうか？ ②日本と韓国の共通点について、知っていることを出させる。 ・家で靴を脱ぐ ・米食箸食 ・漢字文化圏 ・人種的近さ ・言語的には双子関係 ③イラストを見せて設定を説明し、グループでイラストの中の五つのマナー違反を探させる。 「ペンフレンドを訪ね、韓国の首都ソウルにやって来た大学生のケンくんとミーさん。四人で一緒に、韓国料理を食べに行くことになりました。有名人似の友だちと出会い喜ぶ二人ですが、いくつかのマナー違反をしてしまいます。…」 ④グループごとに発表して、全体で共有する。 ⑤教師が説明し、まとめを行う。 ⑥この日の学習全体を通して気づいたこと、考えたことを「振り返り用紙」に書く。	・すぐに韓国の名前が出てくると予想される。 ・韓流ブームもあり、いくらかのことは知っていると思われるが、教師が主導していく。 ・日本のものとよく似た韓国の菓子を見せる。 ・イラスト「『食』から考える異文化・韓国編」配布。作画（ ） ・イラストに描かれた場面 “きちんと正座をして” “手に碗を持って” “ごはんを箸で食べ” “使わない匙はテーブルに置き” “残さず食べました” ・教師用資料参照 ・お隣の国で、顔も似ていて、共通の文化が多くても、違いはたくさんある。この文化の違いが誤解や偏見に繋がることは多い。韓国や中国に対してはそれが生まれやすいことにも触れると良い。

この時間はガーナの文化を紹介しながら、「食」を切り口に異文化を考えさせるものです。食法の違いから、自分にとっては違和感のある文化にもそれぞれの合理性があること、文化には優劣はないことを気づかせます。まずは、体育館でガーナの写真を教材に、「トイレ」「頭に物を載せて運ぶ」「お風呂」「食べ物」について、日本とガーナの生活の違いについて紹介しました。その中でも、特にガーナ料理（フーフー）と手食（手づかみの食べ方）について注目させます。そして、世界にはどんな食べ方があるか考えさせ、さまざまな食べ方を複数の教師が実際にやってみせます。世界の「三大食法」（手食、箸食、ナイフ・フォーク・スプーン食）にはそれぞれの合理性があり、優劣はないことを知らせます。また、4校時後の昼食時間に

は各教室にガーナ料理（フーフー）を配り、手食を体験させます。生徒には、手食に対して「行儀が悪い」「遅れている」という意識があったようですが、この学習の中で「ガーナ人から日本人を見れば、棒のような物（箸）を使ってよく食べられるなあ…と思うんだと思った」「日本では食事の前に手を洗わない人も多いけど、ガーナ人は（手で食べるので）必ず手を洗って清潔でいいなあ…と思った」等の感想も生まれました。さらに、韓国のレストランの食事風景からマナー違反を探すゲームを通して、日本と文化的に近いと思われる国（韓国）でも全く文化が違うことを知り、時にはそれがトラブルにもなることを知ります。「食」は生徒にとってとても親しみやすい教材です。生徒にとって、この日の学習はとても楽しいものだったようです。かつて、人権学習や平和学習は重く苦しいものでした。しかし、人と人が繋がりあい平和な世界を作るための学習が、どうして重く苦しいものでないといけなののでしょうか。私たちは、「楽しく学ぶ」ことを大切にしたいと思っています。

第3次「異文化の中に入ったら…」（6月19日(金)3・4校時）学級単位

学 習 の 展 開		学習支援の留意点																												
※ B a r n g a （バーンガ）		〔110分〕																												
ねらい ・ 自分が異文化に入ったとき、どんな気持ちになり、何を感じるかをシミュレーションゲームを通して実際に経験する。																														
Barnga（バーンガ）とは… トランプを使った異文化体験ゲーム。参加者はグループに別れ、トランプをする、その際、ルールはそれぞれのグループで少しずつ違っている。参加者はグループ間を移動してゲームを続けるが、他のグループのルールは知らされていない。バーンガでは言葉を話してはいけない。身振り手振りなどのジェスチャーを使って、相手とのルールの違いを理解しなければならない。ゲームが終わった後、どのようにして相手と意思疎通を行ったか、グループを変った時、どのようなことを行い、考えたかなどについて話し合いを行う。 バーンガの目的は、異なる文化背景の人達とのコミュニケーションを考えることであり、具体的には次のような学習の要素を持つゲームである。 *シミュレーションによって異なる文化背景の人たちとの接触を体験する。 *その際の自分の感情や態度を観察する。 *自分がいかにホームテーブルのルール(文化)の影響を受けているかに気づく。 *ホームテーブルは多くのテーブルの中のひとつであることに気づく。(自分の文化を外から眺める) *自分のコミュニケーションの仕方の傾向に気づく。 *異なるルール(文化)の人達同士のコミュニケーションのスキル(技能)を探る。																														
【ルールの確認と練習】35分		①各学級の1グループは1組、2グループは2組…4グループは5組、…6グループは7組に移動。移動先の教室でベル着する。4組は椅子を持って移動する。 ②各学級で、担当教師（各教室の担任）から、バーンガのルール説明を行い、各グループで実際にゲームをさせてそれに慣れさせる。 <table><tr><th>教 室</th><th>グループ</th><th>ルール</th><th>担 当</th></tr><tr><td>1年1組</td><td>1グループ</td><td>シートA</td><td>()</td></tr><tr><td>1年2組</td><td>2グループ</td><td>シートB</td><td>()</td></tr><tr><td>1年3組</td><td>3グループ</td><td>シートC</td><td>()</td></tr><tr><td>1年5組</td><td>4グループ</td><td>シートD</td><td>()</td></tr><tr><td>1年6組</td><td>5グループ</td><td>シートE</td><td>()</td></tr><tr><td>1年7組</td><td>6グループ</td><td>シートF</td><td>()</td></tr></table>	教 室	グループ	ルール	担 当	1年1組	1グループ	シートA	()	1年2組	2グループ	シートB	()	1年3組	3グループ	シートC	()	1年5組	4グループ	シートD	()	1年6組	5グループ	シートE	()	1年7組	6グループ	シートF	()
教 室	グループ	ルール	担 当																											
1年1組	1グループ	シートA	()																											
1年2組	2グループ	シートB	()																											
1年3組	3グループ	シートC	()																											
1年5組	4グループ	シートD	()																											
1年6組	5グループ	シートE	()																											
1年7組	6グループ	シートF	()																											

	等は禁止。 ・記録用紙を配布する。 ・教師が「ストップ」と言うまでゲームを続ける。「ストップ」がかかったら、ゲームの途中でもやめて、勝ち数を記録する。
【休憩・移動】10分(13:50～14:00)	・学級担任は教室に待機。副担任は廊下を巡視して、時間になったら生徒を教室に入れる。トイレ可。
【シミュレーション】40分 ③教室に戻って、各グループで第2回戦を行う。1回戦で、一番勝ち数の多かった生徒は番号の上のグループへ、一番勝ち数の少なかった生徒は下のグループに移動する。新しいメンバーでまたゲームを行う。ただし、ここでも<u>絶対に言葉を使</u> <u>ってはいけない</u>ことを確認する。 ④各グループともルールの違いから混乱が起きるが放置する。 絶対に言葉を使わないことを徹底する。 ⑤以上の要領で、メンバー移動を繰り返しながら、10分ずつ3回程度ゲームを行う。 3回戦から5回戦をめやすに実施。時間調整を行い、フィールドバックの時間を確実に確保する。 時間をみて、全てのゲームを終了する。	・10分程度。教師が時間の開始と終了を知らせる。 ・記録紙に勝ち数を記録する。 ・教師は生徒の反応を注意深く観察しておく。 ・移動したメンバーは（初めは気づかないが）自分の知らないルールを体験することになる。つまりは、「異文化の中に入る」ことである。また、ルールを知らないメンバーを迎える。つまり「異文化の人を迎える」という疑似体験をすることになる。 ・ルールが分かることを最終目標にするのではなく、わからないときにはどうしたかを考えるように指導する。 ・混淆ルールで進めているグループはそれも放置する。 ・トランプを片付けさせる。
【フィールドバック】35分 ⑥この日の学習全体を通して気づいたこと、考えたことを「振り返り用紙」に書く ⑦質問を投げかけ、グループ・学級で発表する。 「ゲームの中で困ったことはあったか？」 「それはどんな時か？」 「そのときどんな気持ちがあったか？」 「そのときどのような行動をしたか？」 どんな気持ち・どんな行動	・「振り返り用紙」（その3）配布。 ・「振り返り用紙」の特徴的な意見は学級通信等で共有化を図る。 ・本次の学習の中で最も大切な時間である。生徒一人ひとりがゲームの中で味わった戸惑いや腹立ち、自分の取った態度について、振り返る時間とする。
「怒り」「押しつけ」「もどかしさ」「あきらめ」「投げやり」「無気力」 「吸収し続け、生き残る」「郷に入りては郷に従え」「まとめていこう」…	

⑧この学習のねらい、「Barnga（バーンガ）」というゲームの仕組みや目的について説明する。	・このゲームの目的があくまで疑似体験であることを認識させ、自分自身のゲームの中での感情や態度こそが異文化に触れたときのそれであること気づかせたい。 ・その意味で、このゲームを異なる文化への受容力テストと捕らえた言い方でも良い。 ・前時までの学習を振り返りながら、異文化摩擦について、教師自身の体験や伝聞などを話せると良い。
---	---

自分が異文化の中に入ったとき、どんな気持ちになり、何を感じるのかを疑似体験するアクティビティ。平成19年度には、2学級単位で「バファバファ」を行いました。中学1年生には難しさもあり、平成20年度からは「Barnga（バーンガ）」を行っています。やはり、中学1年生には最初のルールの確認を丁寧に行う必要があります。しかし、ゲームが始まってからの混乱にはショックが大きいようで、怒り出す生徒、泣き出してしまう生徒もいました。また、最後のまとめの中で学級担任から学習の意味について説明を受けた後も、納得できず「なぜ楽しみにしている総合の時間でこんな嫌な気持ちにさせるのか。」と抗議した生徒もあったそうです。異文化に触れた時の戸惑いや腹立ちを疑似体験させるという目的は達成できたと思いますが、もう少し発達年齢に即した工夫が必要かもしれません。

第4次「お互いを尊重し、共に生きるために」（6月26日(金)3・4校時）学級単位

学 習 の 展 開	学習支援の留意点
A ちがいのちがい	〔50分〕
ねらい ・生活の中の「あっていいちがい」について考え、文化や個性の多様性を認めることの大切さを知る。 ・生活の中の「あってはいけないちがい」について考え、人権を尊重するということの意味を知る。 ・一人ひとりの自由を保障しながら、お互いの文化や個性を尊重し、共に生きる社会を作るための責任について考える。	
①説明シートを配布し、「あっていいちがい」「あってはいけないちがい」の簡単な例を紹介し、カードの区別の仕方を理解する。 ②グループ内でカードを読み上げ、そのカードがA「あっていいちがい」なのか、B「あってはいけないちがい」なのか話し合いながら分ける。どうしてもグループ内で意見が一致しないカード、判断が難しいカードは、C「どちらとも言えない」とする。 ③カードを分けたら、貼り付けシートに貼り付ける。ABCに分けた理由も書く。 ④ゲーム終了後、貼り付けシートを黒板に掲示し、各グループの代表は「あっていいちがい」「あってはいけないちがい」の特徴を発表して、教師はそれを整理する。「どちらとも言えないカード」については、黒板に掲示する。	・準備物 □説明シート（全員分） □カード（グループ1組） □貼り付けシート（グループ1枚） □糊（グループ1本） ・シートの各欄の余白に理由をメモ書きする。 ・グループごとに種類分けに違いがあることに着目させる。種類分けの理由についてグループごとに尋ねる中で、観点の違いから種類分けの違いが生じていること

⑤それぞれの特徴について話し合い、共通する特徴を学級全員で確認した後、黒板に掲示した「どちらとも言えないカード」を再検討する。 ⑥グループ別にワークシートを配布し、自分たちの身近にある「あってはいけないちがいがい」を出し合い、話し合った内容をシートに記入させ、グループごとに発表させる。 ⑦次の時間に、外国から日本にやってきて「あっていいちがいがい」と「あってはいけないちがいがい」の谷間で苦しんだ一人の中学生の体験について考えることを伝える。	に気付かせる。 ・ 掲示用カードを用意しておく。 ・ 「あっていいちがいがい」は身体的特徴、嗜好、文化であり、「あってはいけないちがいがい」は生命や自由の権利における不平等であることに気づいていけると良い。 ・ カードの中には日常の学校生活にかかわる「ちがいがい」も含まれている。日常生活の中にある「ちがいがい」に気づき、それがあっていいものか、あってはいけないものなのか、考えさせるなかで、その解決の方向性を見つけさせたい。
B 「ここは日本なのだから」	〔４０分〕
ねらい・異文化接触の生む摩擦について知った上で、民族や文化の違いを認め、尊重しようとする気持ちを持つ。	
①日本の中学校に来た中国人生徒の「陳素さんの作文」を４つのパートに分けて読み進める。 ②作文の背景を簡単に確認する。 異文化の中に飛び込んだ一人の中学生の話 ③【その１】を読む。 不安でいっぱいだった陳素さんがクラスに温かく迎え入れられたこと。 ④【その２】を読む。	・ 出典：川崎市立中学校生徒作文『「共に生きる子ども」を育てる国際理解教育』（佐藤郡衛・佐藤裕之編／教育出版／2006.10） ・ 神奈川県川崎市に実在したある外国人中学生の作文であること。国際化社会と言われる中で、日本の中学校に外国人の生徒が編入してくることも少なくない。広島市内でも鞆町中・中広中には外国から来日した生徒のための教室がある。 ・ ここからはパートごとに手紙を読み進める。

**発問「ドッジボールに対する意見を素直に言った陳さんを
どう思うか？」**

—自分の気持ちを正直に言うことはいけないことなのか…

⑤【その３】を読む。

**発問「陳さんの成績が上がり、態度を変えていったまわりの
生徒たちをどう思うか？」**

—勉強を頑張ること、目立つことはいけないことなのか…

⑥【その４】を読む。

発問「名前をからかうことについてどう思うか？」

**発問「ここは日本なんだからしかたがないという発言を
どう思うか？」**

—自分が自分であることとは…、
お互いの違いを認め合うこととは…

⑦生徒の感想を聞き出しながら、まとめを行う。

・発問について“主人公に共感”“主人公に反対”双方の意見を出させる。少数意見を弁護しながら、話し合いを活発に仕組んでいく。

・活発な意見交換を通して、一般論ではなく本音の意見が引き出せるよう、生徒の心に迫るような展開を工夫する。

・この場面では、教師の配慮のなさにも大きな課題がある。

・生徒からは、「日本には日本の考え方や習慣があるからしかたがない」「日本で生活する以上、我慢することも必要である」という意見がでることも予想されるが、頭ごなしに否定するのではなく、お互いを認めあいながら解決に努力することの大切さを確認する。

C 学習のまとめ

[10分]

**ねらい・異文化理解学習のまとめを行い、学習の成果を日々の生活と結びつけていくことの大切さを
知る。**

①「ユネスコ憲章前文」を紹介し、人々が互いの文化を知らないことは戦争につながることを、互いの文化を認めあうことが平和への道であることを確認する。

②これまでの学習を振り返り、私たちの中には知らず知らずのうちに、「思いこみ」「偏見」等が生まれており、それを自覚することが異文化理解の第一歩であることを確認する。

③「違いを認めあうこと」の可能性について、教師の確信を語る。

自信をもって！ 感動的に！

・現在のキリスト教・ユダヤ教とイスラム教との関係を始め、世界各地で起こっている民族紛争や宗教紛争を例示すると良い。

・「レヌカの学び」で学んだことを思い出させる。

・世界に目を向け、人類が差別と偏見を乗り越え、相互理解を深め、よりよい社会の実現へと前進している例を挙げる。

・資料…新聞コピー（朝日・中国）
平成20年11月6日（木）
「米大統領にオバマ氏」
「人種超え新たな歴史」
「白人と黒人抱き合い涙」
「『変革』訴え黒人初」

【例】 アフリカ系アメリカ人（人口約３５００万人／全人口の約１３％）の歴史から

１５～１８世紀 大航海時代 三角貿易（奴隷貿易）

ポルトガル人により９００～１５００万人のアフリカ人が奴隷として南北アメリカへ。
アメリカでも奴隷売買が行われ、綿花プランテーションの労働力として酷使される。

１９世紀になり、奴隷解放運動が起こる。（英では１８３３年に奴隷制度廃止）

→ 南北戦争 → １８６３年「奴隷解放宣言」

しかし、南部諸州では人種による差別（ジョン・クロウ法…人種隔離法）が続く。

→ 公民権運動 → １９６４年「公民権法」成立。 法的差別完全撤廃。

４００年にわたるアフリカ系の人々への差別…。

しかし、さまざまな人種の人々がその解消にむけて努力を重ねてきた。

そして、２００８年１１月…

わたしたち人類はその叡智で、差別や偏見を克服することができる。

人々はきっと分かり合える。 歴史は私たちの手で作ることができる。

④「違いを認めあうこと」は、自分たちの教室の中の課題でもあることを押さえる。

⑤異文化理解学習全体を通して気づいたことや、考えたことを「振り返り用紙」に書く。

- ・「ここは日本なのだから」と同じようなことは教室の中にあるか？
- ・学級の中にあるさまざまな課題もきっとみんなの知恵で解決できる。

- ・「振り返り用紙」（その４）配布。
- ・「振り返り用紙」の感想は、学級通信等を使って生徒に返してけると良い。

※ 今回の学習で考えた「違いを持つ人々と共に生きる」ことは、遠い外国との話ではなく、自分たちの教室の中のことであることを絶えず意識させていきたい。
教室内で誤解や偏見から生まれたトラブルがあれば、この学習で学んだことを話題にしていってほしい。

今回の「違いを認め合うということ」学習のまとめとなる時間です。前述したように、今回の学習は「これからの国際化社会を生きていくために、世界のさまざまな民族・文化と共生していく力を培うものであると同時に、まずは自分の身の回りの仲間をどう理解し、共生していくかを考えさせる学習」です。つまりは、これまでの学習で世界へと広がった関心を、隣の席のクラスメートへと引き戻していく時間でもあります。まずは、「ちがいのちがいが」（オリジナル版）で生徒の日常生活の中の「違い」の質について考えます。その後、日本の中学校に来た中国人生徒の作文を読み進めながら、異文化接触の生む摩擦について考えさせます。この作文から、自分たちの中にも自分と異なるものを排除しようとする意識があることに気づかされます。そして、最後に学級担任から、これまでの学習を振り返り、私たちの中には知らず知らずのうちに、「思いこみ」「偏見」等が生まれており、それを自覚することが異文化理解の第一歩であること、そして「違いを認めあうこと」は、自分たちの教室の中の課題でもあること、自分たち自身がいろいろな個性を認めあえる学級を作っていくことが、実は世界平和へとつながっていくことを語っていきました。アメリカ大統領選挙の結果（建国後初のアフリカ系大統領誕生）を教材化したのは、「人類の可能性」について確信を持たせるためです。解決不可能と思われていた「奴隷制」を撤廃し、長く差別にさらされていたアフリカ系アメリカ人を大統領に選出したという事実から、私たち人類はその叡智で、差別や偏見を克服し、お互いを大切にできる社会を作ることができることを、（心のどこかでいじめや差別は決してなくならないと思っている）生徒たちに伝えるためでした。少なくとも今回の学習の中で教師がねらいとしたことは生徒たちに伝わったように思います。また、国際理解（異文化理解）とは国と国との関係だけでなく、人と人、そして自分と周りの人との関係のことなのだということができたように思います。

4. 実践六年目の成果と課題

本校で開発教育の視点・手法（参加型学習）を取り入れた国際理解教育に取り組み始めて六年になります。一年一年教材開発を重ね、一つひとつ学習ユニットを作り上げる中で、現在の形になっています。本校の国際理解教育の取り組みが、研究指定校等としての位置づけの全くない、つまりは、やるべき義務など何もない取組であることを考えると、ある意味でそれは特殊な状況であるのかもしれませんが。ここで、六年目を迎えた実践を振り返り、その成果と課題を明らかにしたいと思います。

まず、何よりの成果としては、この国際理解教育の取り組みが生徒からの高い支持を得ていることです。特に、参加型学習を中心にした学習方法は、生徒に強い印象を与えています。毎年実施しているグループ・インタビュー（学校評価システムの一つとして実施している抽出した複数生徒からの聞き取り調査）では、総合的な学習の時間について「楽しい」「役に立っている」という評価を得ています。中でも、2・3年生からは、国際理解教育について「チョコレートやバナナの学習が心に残った」「食べ物を粗末にするまいと思った」「世界の見方が変わった」「世界の裏側を見た気がした」等の感想が得られています。また、特徴的なのは学習過程の中で「みんなのことがわかりあえる」「クラスがまとまっていくような気がする」という意見があることです。これについては実際に授業にあたる学級担任からも、「総合的な学習の時間（国際理解教育）の中で、学級の雰囲気がどんどん良くなる。」という感想があります。「方法はメッセージを持つ」という言葉どおり、「学習プロセスの中で『人との関わり』について学ぶ」というねらいは達成しつつあるように思います。平成15年度までの本校の国際理解教育（1学年のみ）は、「外国人留学生との交流会」を中心としたものでした。こういった取り組みの場合、その時間は楽しく過ごせても、後には「おもしろかった」という感想しか残らないということがよくあります。それに対して、参加型を中心とした学習は、生徒の心に「異文化や異なる文化をもつ人々を受容し共生する」ための基盤づくりに役立つものであると思います。本校の「仲間との関わりを育てる国際理解教育」という目標は間違っていないようです。

また、この六年間の取り組みの中で、参加型学習の手法を教職員が身につけつつあることも成果の一つです。前述したように、本校の取り組みは、学年単位で実施される学校全体の取り組みです。学級担任を中心に多くの教師がファシリテーターとしての役割を果たしています。多くの教師が参加型学習を経験する中で、参加型学習に魅力を感じていることは強みです。授業準備に大変な労力（授業の進め方についての研修・教材準備等）を割きながら、場合によっては自腹も切りながらも（食材等は予算の出所がないため、教師の自腹とならざるをえない）、国際理解教育を進めることができるのは、なにより「授業が楽しい」という思いと、生徒からの手応えです。自主的に、JICA中国等の研修会に参加する教師も出てきています。どのような教育実践にしても、中心となる教師が転任すれば雲散霧消するということもよくあることですが、本校の教職員の中にも国際理解教育（参加型学習）の基盤はできつつあると思います。

また、課題としては、次のことが挙げられます。

- ・学習の成果を日常生活の課題へと繋げること。

時間的な制約もあり、安直に感想文を書かせることで終わっているユニットもあります。学習後に学級通信等で共有化を図るように計画はしていますが、必ずしもできていない部分もあります。学習したことを日常の学校生活にどう生かしていくのか、学級経営とどう繋げていくのか、教師の意識を高めていく必要があります。

- ・中学校三年間を見通した系統性の確立を図ること。

生徒の学びの深まりや、教科学習・行事・学級経営の流れとの関連、スキル学習の配置を考慮した、学習ユニットの構成をさらに追求していくことが必要だと考えています。特に、キャリア教育との関連を考慮し、「生き方」学習としての側面も意識した年間計画を組み立てるべきであると思います。

- ・ファシリテーターを苦手とする教師への支援を進めること。

教師の中には、その指導スタイルから参加型に馴染めない教師もいます。ティームティーチング等の導入も図っていますが、「仲間づくり」という意味からは、学級担任が中心となって取り組むべき部分もあります。学校・学年としての支援のあり方を考えていく必要があります。

- ・実践の検証を行い、取組の改善を図ること。

前述したように、本校の国際理解教育は全く独自の取組です。研究発表の場はあるものの、なかなか取組の見直しに繋がるものにはなっていません。また、多忙の中で一つひとつの学習ユニットを終えての反省もでききれてないのも現実です。六年間の実践の検証を行い、取組の改善を図っていくことが求められています。

広島市においては、国際理解教育への理解はまだ高いものではありません。まさに「外国語や社会科等の教員や、関心のある教員が取り組めばよいもの」であり、「単なる体験や交流に終わってしまう」実践がほとんどであると言っても過言ではないと思います。また、参加型学習もあまり知られていません。人権教育や平和教育に熱心な教師からの誤解・曲解もあります。しかし、漸進的にですが、広島市でも国際理解教育や参加型学習への理解・関心が広がりつつあるようです。本校で作成した学習指導計画を参考にして、国際理解学習に取り組み始めた学校も出てきています。

本校の六年間の取組みの中で明らかになったことは、「目の前の一人ひとりの生徒を繋いでいくこと、生徒と生徒の関わりを育てていくことこそが、国際理解教育の基底であると同時に目標である。」ということだったと思います。中学校3年の国語教科書（光村図書）には、次のような文章があります。

「国際性、国際性とやかましく言われているが、その基本は、流れるような外国語の能力やきらびやかな学芸の才気や事業のスケールの大きさなのではない。それは、相手の立場を思いやる優しさ、お互いが人類の仲間であるという自覚なのである。その典型になるのが、名もない行きずりの外国人の私に、口ごもり恥じらいながら示してくれたあの人たちの無償の愛である。求めるところのない隣人愛としての人類愛、これこそが国際性の基調である。そうであるとすれば、一人一人の平凡な日常の中で、それは試されているのだ。」
（「温かいスープ」今道友信）

「自分自身を見つめること」「仲間との関わりを育てること」を基底とし、同じ教室で学ぶ仲間から地域・日本・世界へと同心円状に広げて考えることで、「人類共通の課題に取り組む主体を育てる」こと。つまり、生徒たちが毎日の学校生活の中で自分自身の姿を見つけ、仲間との関わりの中で思いやりや優しさの心を育むこと、それこそが国際理解教育の基調なのだと、私たちは考えています。

（執筆責任者 広島市立宇品中学校 主幹教諭 岡田 祐一）

【添付資料】

- （1）1年学習指導案「クラス目標を作ろう！」（平成21年度）
- （2）1年学習指導案「仲間と自分を考える」（平成21年度）
- （3）1年学習指導案「お互いを理解すること」（平成21年度）
- （4）1年学習指導案「地球市民の一人として」（平成19年度）
- （5）2年学習指導案「クラスの一人として」（平成21年度）
- （6）2年学習指導案「対立を解決するための方法」（平成21年度）
- （7）2年学習指導案「世界の人々と共に生きるために」（平成20年度）
- （8）3年学習指導案「クラスの仲間と共に」（平成21年度）
- （9）3年学習指導案「平和を築く～「難民問題」を通して考える」（平成21年度）
- （10）3年学習指導案「世界で働く！国際ボランティア」（平成21年度）

【主な参考資料】

国際理解教育学習ユニット作成にあたっては、以下の書籍・教材を参考にさせていただいています。既成のアクティビティを中学校の教室向けに改作したり、オリジナルのアクティビティと組み合わせることで、中学生という発達段階に即した学習内容としています。

- 『新しい開発教育のすすめ方』（開発教育推進セミナー／古今書院／1995）
『わたし 出会い 発見』（大阪府同和教育研究協議会／1996）
『ユニセフの開発のための教育－地峡市民を育てるための実践ガイドブック』（財団法人 日本ユニセフ協会／1998）
『参加型学習で世界を感じる－開発教育実践ハンドブック』（開発教育協会／2003）
『世界と地球の困った現実』（国際飢餓対策機構／明石書店／2003）
『教室から地球へ 開発教育・国際理解教育 虎の巻』（独立行政法人 国際協力機構 中部国際センター／東信堂／2006）
『「共に生きる子ども」を育てる国際理解教育』（佐藤郡衛・佐藤裕之編／教育出版／2006）
開発教育教材「たずねてみよう！カレーの世界」（開発教育協会／2000）
開発教育教材「NEWマジカルバナナ」（特別非営利活動法人 地球の木／2003）
開発教育教材「レヌカの学び－自分の中の異文化に会う」（土橋泰子／2004）
開発教育教材「新・ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら」（開発教育協会／2006）

他